

三重県南部地域の複式学級における 圧縮版年間指導計画に基づく外国語指導の実践について

大野 恵理・須曾野 仁志・萩野 真紀・榎本 和能

三重大学

Introducing compressed curriculum of English to multi-grade classes in the southern part of Mie

Eri ONO, Hitoshi SUSONO, Maki HAGINO, Kazuyoshi ENOMOTO

Mie University

概要

三重県南部地域は過疎化が進み、複式学級率が34%である。この地域の教育支援が、筆者らが所属する三重大学東紀州サテライト東紀州教育学舎によって2017年9月から本格的に始まった。地域の第一の要望は、小学校複式学級における外国語活動において、「児童みんなが一緒に楽しんで学べて、確かな学力をつけることができる指導法や指導内容を提案して欲しい」ということであった。支援活動をより効果的・効率的にするために、インストラクショナル・デザインのADDIEモデルに沿って進めた。本研究は、2017年9月から2020年3月までの支援活動の詳細や結果をまとめた実践研究論文である。

1. はじめに

複式学級とは、「他の学年の児童と合わせて16人までの時は、これをもって1学級を編成する」ことであり（文部科学省, 2000）、三重県南部の5市町（紀北町、尾鷲市、熊野市、御浜町、紀宝町）にある小学校180学級のうち34%が複式学級である（2017年度）（三重県, 2017）。過疎化が進むこの地域には高等教育機関がなく、最寄りの高等教育機関である三重大学から最南端の紀宝町までは約140kmで、自動車道や鉄道を使って3時間程度かかる。この地域の教育を支援する目的で、「国立大学法人機能強化促進費」の助成を受けて、三重大学東紀州サテライト東紀州教育学舎が設置され、2017年9月より著者らによる教育支援活動が始まった。

教育支援活動を始めるにあたり、活動をより効果的・効率的にするためインストラクショナル・デザインのADDIEモデルに沿って進めることにした。インストラクショナル・デザインとは、教育を中心とした学びの「効果・効率・魅力」の向上を目指した手法のことで、その1つのADDIEモデルとは、学びが効果的かどうか確かめるために、最初に目標を明確に設定していくことと、徐々に繰り返し改善していくことを重視したモデルである（鈴木, 2016）。

2. A (Analysis) 第一段階「分析」

2017年9月より、地域の教育関係者や教員に聞き取り調査を実施した。その中で支援要請が多かったのが小学校複式学級における「外国語活動」であった。この地域では、ほとんどの複式学級で外国語活動は「A・B年度方式」で指導されていた。この方式は「同教科同単元同内容程度」や「2本案」とも呼ばれ、2学年の内容をA年度とB年度の2年間に配分し、いずれの年度においても両学年に同時に同じ内容を同じ目標のもとに同程度指導する（鳥根県教育委員会, 2019）。例えば2015年度は第5～6学年でHi, Friends! (1)を、2016年度は、Hi, Friends! (2)を補助教材として使用して指導することである。外国語の指導における「A・B年度方式」の長所は、より多くの人数で学べるため、コミュニケーション活動が重要である外国語の学習では、ペア活動等を通してより多くのパートナーと練習をすることができ、多様な見方や考え方に会えることができる。また、教員にとっては、2学年分の教材研究をしなくてよいため負担が少ないことである。

しかし、系統的な内容の指導は不可能で、第6学年の学習内容（例：I can …）を、第5学年の内容（例：自己紹介、My name is …）の前に学習することがあるため、児童にとっては負担が非常に大きく、小学校の段階で「英語は分からない」、「英語は嫌い」になってしまう可能性がある。さらに、下学年の児童に対して上学年の児童との能力差や

経験差が埋められないままに授業が展開された場合に、目標の達成が難しいと考えられる。さらに、複式学級の第5学年でB年度（第6学年の学習内容）を学んだ児童が、第6学年時で他校の単式学級に転出した場合、第5学年の学習内容を全く学習する機会がない、という事例も報告されていた。

三重県南部地域の複式学級では、ほとんどの教科で指導内容や指導方法（「わたり」や「ずらし」）を工夫して「学年別指導」が行われているが、外国語の学習に関しては「「わたり」や「ずらし」や「A・B年度方式」ではなく、児童がみんなで楽しみながら、「確かな学力」を身に付けることができる指導方法や指導内容を提案して欲しい。」というのが、地域の教育関係者や教員の要望であった。こうした地域の実情やニーズを踏まえて、指導方法や指導内容を設計することになった。

3. D (Design) 第二段階「設計」

複式学級の指導には、さまざまな指導方法があるが、その中で地域のニーズを反映しているのは「同単元同内容異程度」の指導である。これは「完全一本案」と呼ばれ、2学年分の学習指導要領に示された内容を圧縮して1年間で学習できるよう単元を構成し、異程度で2年間繰り返し指導することで、「くりかえし案」とも呼ばれる。この案によって指導する長所は、①両学年の単元や内容を同じくし、同じ雰囲気や学習しながらも、学年差に応じた指導が可能になる、②上学年の児童が1年目に目標に到達できていない場合には、実態に応じて2年目に下学年の児童と共にもう一度学習することができる、③学級編成の変動に対処することができる、④教材研究を系統的発展的に行うことができること等である。その一方で、①圧縮により時間的な余裕がなくなること、②系統性を考慮した年間指導計画を作成する必要があること、③下学年児童や人数が多い学年への指導時間が多くなること等がある（島根県教育委員会, 2019）。この3つの短所を、何らかの形で補うことができれば「完全一本化案」は可能であると考え、以下のような形で補うことにした。

まず、1つ目の短所である「時間的余裕がなくなること」に関しては、2つのアプローチを考えた。1つ目は、既存のICTを積極的に活用することで、時短で指導することを目指した。ICTについては、三重県南部地域の小学校の教室には、テレビモニター、インターネット、指導用パソコン（ない場合は、担当教員が私物パソコンを使用）が揃っている場合が多かった。2つ目のアプローチは、補助教材「We Can!」で扱われる700程度の語彙を分析し、聞いたときに理解できる「受容語彙」より、話すときに使うことができる「発信語彙」に時間をかけて丁寧に指導することである。「受容語彙」と「発信語彙」についてはリストのようなものがないため、著者らが補助教材の活動を分析し、発信的活動（例：発表、やりとり）で扱われる語彙を中心

に時間をかけて丁寧に指導できるように配慮することとした。

2つ目の短所「系統性を考慮した年間指導計画を作成することについては、著者らのうち3名が中学校英語科の教員免許があるため、この短所については問題ではなかった。3つ目の短所「下学年児童や人数が多い学年への指導時間が多くなること」については、単式学級でも児童の習熟度に応じた指導をするために、担任が具体的な手立てを考へることが求められる。よって、完全一本化案でも習熟度に応じた学習目標を年間指導計画で明示することや、週に一回来校するALTの活用等で、この短所を補うことができると考えた。

4. D (Development) 第三段階「開発」

地域のニーズである「「わたり」や「ずらし」や「A・B年度方式」ではなく、児童がみんなで楽しみながら、「確かな学力」を身に付けることができる指導方法や指導内容を提案して欲しい」ことを実現するために、設計段階で「完全一本案」で指導することに決め、欠点を補うための手立てを考えた。第三段階では、具体的に「完全一本案」の年間指導計画を開発した。著者らが開発した「完全一本案」の指導案は、三重県南部地域では「圧縮版」と呼ばれ、その特徴は以下の3点である。

特徴①（時短の工夫その1）：1つ目は、「圧縮版」の欠点の1つである時間的余裕のなさについては、時短のためにICTを活用した。例えば、補助教材「We Can!(1)」のUnit 5 “She can run fast. He can jump high.”の単元では、「canを使った表現」に慣れ親しむためにNHK for schoolの「エイゴビート」の「第九回：スケートができるよ」の3分30秒ほどの動画を児童に見せるように提案した。従来の指導法では、担任が考えたスキット（寸劇）をALTと一緒にして「canを使った表現」の導入とすることが多かった。しかし動画で学習することは、児童にとってはより短時間で表現に慣れ親しむことができ、指導者にとってもスキットを準備する時間を省略することができる。

動画がない場合には、著者らが動画を作成し公開した。例えば、「We Can!(1)」のUnit 5では、「canを使った表現」と「he/sheを使った表現」と慣れ親しむことになっている。he/sheの表現慣れ親しむための適切な動画がなかったため、著者らが動画を作成し、YouTubeにアップロードして三重県南部地域の教員に限定公開した。

学習に動画を活用することは時短以外にも、児童のより深い学びにつながると考えられる。アメリカのメイヤーによって提唱されている「認知的マルチメディア・ラーニング理論」では、「人は言葉（words）だけより言葉と絵（pictures）の両面からより深く学ぶ（People learn more deeply from words and pictures than from words alone.）」と考えられている（Mayer, 2009）。デジタル世代の児童にとって、動画（pictures）、字幕（words）、音

声 (sound) に触れることで、多感覚 (視覚・聴覚) を刺激してより深く学ぶことができると考えられる。

特徴② (時短の工夫その2) : 2つ目の時短の工夫は、新出語彙を「受容語彙」「発信語彙」に分けて、話す時に使える「発信語彙」を優先的に時間をかけて指導するように提案した。語彙を学ぶことに優先順位を付ける際に参照にしたルールは、“seven plus, or minus two”である。これは人間が短期記憶できる情報数は、一般に5～9の間で、7を中心として±2の範囲であるということである (Miller, 1956)。例えば「We Can! (1)」のUnit 5のp37では「canに関連した語彙」が15出てくる (①sing well, ②cook well, ③swim, ④jump high, ⑤run fast, ⑥play soccer, ⑦play basketball, ⑧play volleyball, ⑨play kendama, ⑩play table tennis, ⑪play the piano, ⑫ride unicycle, ⑬play the recorder, ⑭do kendo, ⑮do judo)。これらをすべて1時間に学習するのは、7±2というルールでは不可能である。よって、圧縮版では①～⑩の語彙を学習するように指導した。③swim, ⑥play soccer, ⑦play basketballは外来語として使われていることを考えると、上記3語は新出ではないと考えられるため、児童にとって実質の新出語彙は7となる。⑪～⑮の語彙に関しては「受容語彙」とし、「聞いた時に理解できる」ことができる程度の指導を提案した。

特徴③ (系統的な指導) : 2つ目の特徴は配当時数の工夫である。文部科学省が公開している「年間指導計画例」(単式学級用)を基に、単式の配当時数が4の単式の場合、「圧縮版」では圧縮時数2とし、単式によって圧縮時数2では指導できないと考えられる場合には、圧縮時数3とした。その一方で、圧縮時数2よりさらに時短で指導できると考えられる場合は、圧縮時数1.5とした。

また、年間指導計画に加え、指導案 (第5～6学年50時間分)も開発した。三重県南部地域にとって「圧縮版」で指導することは初めてのことで、年間指導計画だけでは現場の教員が混乱することが予測された。指導案は、従来含まれる内容以外に「指導者のセリフ」まで詳細に記載し、また担任がALTをうまく活用して指導しやすいように「日・英」の二か国語表記にした。

5. 1 (Implementation) 第四段階「実施」

第3段階で開発された「圧縮版年間指導計画」と、50時間分の指導案は、三重大学Moodleにアップロードされ三重県南部地域の教員に限定公開され、2018年4月から2019年3月まで地域の第5～6学年の多くの複式学級で活用された。さらに、「ICTを活用した圧縮の授業がイメージできない」等の学校には、著者らが出前授業を行って見本を見せたり、教員研修を行って「ICTを活用した圧縮版の授業」の進め方を説明した。2018年度に著者らが行った出前授業は91回 (受講した児童数1082)、教員研修17回 (受講した教員数245)である。

6. E (Evaluation) 第五段階「評価」

第五段階は「評価」では何を評価するのか?であるが、地域の要望「「わたり」や「ずらし」や「A・B年度方式」ではなく、児童がみんなで楽しみながら、「確かな学力」を身に付けることができる指導方法や指導内容を提案して欲しい。」という要望を考え、①児童がみんなで楽しんで学習できているかどうか、②確かな学力が身に付いているかを評価することにした。

①については、外国語 (英語) 学習について児童の意識調査をすることにした。②については、何をもって「確かな学力」とするかであるが、文部科学省の「平成26・27年度英語教育強化地域拠点事業～島根県の例～」では、島根県雲南市の複式学級での外国語活動の新しい取組みの研究において、取組み前半期と後半期の児童が英検Jr.ブロンズ (児童英語の民間検定) の点数を比較して取組みの効果を検証している (文部科学省, 2015)。本研究では、英検Jr.のサンプル版 (インターネットで無料公開)に加え、独自の聞き取りテストと書き取りテストを準備した。聞き取りテストは、第5～6学年で学習する単元の「聞く活動」を参考に独自で問題を作成した。書くテストは、児童がアルファベット大文字・小文字を正しい順番で正しく書くことができているかを測定する独自テストを作成した。

①意識アンケートと、②確かな学力を測る3種類のテストは、三重県南部地域の第5～6学年複式学級A (児童数5)と、第6学年単式学級B (児童数29)に協力を仰ぎ、AとBの結果を比較した。調査の結果、書き取りテスト以外の3種のテストやアンケートで複式Aが単式Bより平均点が少し高いことが明らかとなり、複式学級で圧縮版年間指導計画に沿って学習した児童の方が、単式学級で通常の間指導計画に沿って学習した児童よりも、聞く力や英語に対する意識が高いと言えた。(表1) (大野・須曾野・萩野・榎本, 2019)。

表1 複式Aと単式Bの平均点 (2018年度)

	平均点			
	英検 Jr	聞き取り テスト	書き取り テスト	意識 アンケート
複 A	11.70	7.00	14.80	33.40
単 B	11.28	6.45	16.90	31.28

しかし、この調査には問題点が3つ挙げられた1つめはテストの妥当性である。著者らは、本研究では「確かな学力」は、「学習した内容が定着しているか」と捉えていたので、テストは既習の表現や語彙の定着を測るものが妥当であると考えていた。英検Jr.ブロンズでは、未習の表現や語彙が多く出てきたため、「実力テスト」の要素が強いと感じた。

また、英検Jr.について複数の児童が、「知らない英語が出てきて不安。」「難しかった。」と感想を述べていた。本研究の趣旨から考えると、「既習の表現の定着率」を測るために著者らによって開発された聞き取りテストが妥当と考えられ、英検Jr.の結果は参考程度に扱うことが望ましいと考えた。

2つ目の問題は信頼性である、英検Jr.は専門機関によって開発されたテストで、信頼性が高いと考えられる。前述の、島根県の例でも英検Jr.が効果の検証をする際に用いられていた。その一方で、妥当性が高いと考えられる著者らが開発したテストは、信頼性は確立されていない。また、信頼性を確立するための専門知識や財源も持ち合わせていない。妥当性はないが信頼性のある英検Jr.の併用について、今後、考えていく必要がある。

3つ目の問題は、サンプルサイズが小さいことである。複式学級Aの児童数は5名であるため、複式学級Aと単式学級Bの特徴を比較する記述統計学となり、今回の結果から地域の複式・単式学級でも同じような現象があると推測することができない。今回のテストの結果は、あくまで複式学級Aと単式学級Bの特徴の比較にとどまる。今後、サンプルサイズを大きくして、推測統計ができるようにする必要がある。

2017年9月から2018年3月まで、ADDIEモデルに沿って、三重県南部地域において教育支援活動を行った。支援活動の中心となったのが「圧縮版年間指導計画」であるが、小学校外国語における「圧縮版年間指導計画」の学習効果は、まだ研究が進んでいない。本段階Evaluation（評価）を形成的評価とし、2019年度も本研究を続けることにした。

7. 2年目の支援活動（2019年度）

2019年度は、前年度の形成的評価の結果を踏まえて、第四段階Implementation「実施」から始めた。前年度に開発された「圧縮版年間指導計画」や50時間分の指導案は、必要な加筆修正がされ、三重大学Moodleにアップロードされ三重県南部地域の教員に限定公開された。また、前年度に引き続き、出前授業や教員研修も行った。そうした支援活動の結果、2019年度には三重県南部地域のほとんどの複式学級における外国語の指導には「圧縮版年間指導計画」が利用された。2019年度に著者らが行った出前授業は50回（受講した児童数407）、教員研修16回（受講した教員数212）である。

第五段階Evaluation「評価」であるが、地域のX教育委員会が協力してくれることになった。評価方法であるが、X管内すべての①複式学級第5～6学年と、②単式学級第6学年に、「聞き取りクイズ」、「書き取りクイズ」、「アンケート」を行った。前年度から変更した点は、英検Jr.を使わないことである。「評価」が必要なのは「確かな学力」であって「実力」ではないため、既習表現以外の内容を多く含む英検Jr.は本研究には妥当でないと判断した。また、

「聞き取りテスト」、「書き取りテスト」を、「聞き取りクイズ」、「書き取りクイズ」とした。2019年度に実施した教員への聞き取り調査や、X教育委員会との打ち合わせで、「テスト」とするよりも「クイズ」として「学習のふりかえり活動」の一環で実施した方がよいと判断されたからである。2019年度末に、X教育委員会管内のすべての複式学級第5～6学年30名と、すべての単式学級第6学年82名の児童に、2種類のクイズ（聞き取り・書き取り）と、英語学習に対する意識調査を行った。聞き取りクイズ、書き取りクイズともに、第5～6学年の学習内容のふりかえりで、補助教材We Can! (1)と(2)で出てくる既習表現を使って、独自のクイズを作成した。

聞き取りクイズ（12点満点）においては複式学級第5～6学年の平均点がやや高いものの、統計的に有意差はなかった。書き取りクイズ（12点満点）においては、単式学級第6学年の平均がやや高いものの、こちらも統計的に有意差は見られなかった。また、英語学習に対する意識調査についても、大きな差は見られなかった。

2019年度にX教育委員会管内で行ったクイズとアンケート結果を総合的に判断して、「圧縮版年間指導計画」に沿って学習した児童と、通常の年間指導計画に沿って学習をした児童を比較した場合、「聞くこと」と「書くこと」においては統計的な差は見られず、複式学級の児童は単式学級の児童と同程度の学力を身に付けることができていると考えられる（表2）。この結果は、2018年度に行った調査結果と同じ傾向にある。単式学級の児童に比べて、複式学級の児童は聞き取りでは平均点が高いが、書き取りでは低い。よって複式学級では、「書くこと」の活動を少し増やす必要があると考えられる。

表2 X教育委員会管内の結果（2019年度）

	単式		複式		t 値	自由度	有意確率 両側
	M	SD	M	SD			
聞き取り	8.6	2.2	10.3	1.6	-1.6	110	0.1
書き取り	9.2	1.6	8.6	2.1	1.6	110	0.1

8. 3年目以降の支援活動（2020年度）

2020年に「新学習指導要領」が全面実施となり、東紀州地域の第5～6学年は「One World Smiles」（教育出版）を教科書として使っている。新しい教科書に合わせて、著者らは圧縮版年間指導計画を作成し、地域の教員に限定公開している。

今年度は、圧縮版年間指導計画に、簡易な指導案（70時間分）を付けることにした。前年度からの変更点は、指導案が簡易になったこと、日・英の2か国語表記から日本語のみの表記になったことである。前年度までの指導案は、担任のセリフまで書いた詳細なものであったが、2年間で各担任が圧縮版で指導する力を付けたと考えられることと、簡易な指導案で全体像を見たいという要望に応じて簡易なものを作成した。2か国語表記のものを作成するかどうかについては、担任やALTに聞き取り調査をして、作成するかを決める予定である。

2020年度は、COVID-19の影響で授業数を確保することさえ難しく、前年度のようなクイズやアンケート調査協力が厳しくなると考えられる。しかし、X教育委員会管内だけではなく、残り4つの市町の1校でも多くの学校に協力してもらい、「圧縮版年間指導計画」が「確かな学力」を保証できているのか、研究を続けていく予定である。

全国には4,549の複式学級があり（文部科学省, 2019年）、One World Smilesで外国語を学習している第5～6学年の複式学級が複数あると考えられる。そうした学級での指導の参考のために、著者らが開発した第5～6学年圧縮版年間指導計画の一部（第5学年の最初）を掲載する（表3）。また、著者らは第5～6学年に加え、第3～4学年の圧縮版年間指導計画を開発し、2018年度より地域の教員へ限定公開をしている。第3～4学年については、全国で共通の補助教材「Let's Try!」が活用されているため、これについては全国の第3～4学年の複式学級で活用することが可能である。その一部（第3学年の最初）も併せて掲載する（表4）。

謝辞

研修参加や情報を共有して下さった三重県教育委員会、2018年度に調査協力をして下さった複式学級Aと単式学級Bの児童と担任の皆さま、2019年度に調査協力をして下さったX教育委員会に深謝します。

参考文献

- Mayer, R. E. (2009). *Multimedia Learning* (2nd ed.). Cambridge: Cambridge University Press.
- Miller, G. A. (1956). The magical number seven, plus or minus two: some limits on our capacity for processing information. *Psychological Review*, 63 (2), 81-97.
- 島根県教育委員会 (2019) 複式学級指導の手引き（令和元年度改訂版）.
<http://eio-shimane.jp/project/hukushikyoku/319>
（参照日2020.6.7）
- 鈴木克明 (2016) インストラクショナルデザインの道具箱 101, 北大路書房
- 三重県 (2017) 平成29年度学校基本調査の結果確報（三重県）の公表

<https://www.pref.mie.lg.jp/common/07/ci600013488.htm>（参照日2020.6.7）

文部科学省 (2019) 学校基本調査－令和元年度結果の概要－
https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/kihon/kekka/k_detail/1419591_00001.htm（参照日 2020.06.29）

文部科学省 (2015) 平成26・27年度英語教育強化地域拠点事業～島根県の例～

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/058/siryo/_icsFiles/afielddfile/2015/12/08/1365071_6_2.pdf

（参照日 2018.07.07）

文部科学省 (2000) 今後の学級編成及び教員定数改善に関する意見

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/069/shiryo/attach/1291696.htm

（参照日 2018.07.07）

表4 Let'S Try!(1)圧縮版年間指導計画(見本)

複式	単元	単元名	圧縮	時間	めあて/can do	復習	導入	活動1	活動2	活動3	時間が余ったら
1	1	Hello!	1	1	①世界にはさまざまなあいさつがあることに気付く。 ②名前を言って挨拶をし合う。	ALTのあいさつ	p.2 W&T 【抜粋】日本を見せた後、以下の国を見せる：①中国、②ドイツ、③ケニヤ、④インド、⑤韓国、⑥アメリカ	p.3 C	p.4 L	p.5 A	エイゴビート【第1回】0:00~3:26 https://www.nhk.or.jp/eigo/beat/?dastid=D000514022400000
2	2	How are you?	1	1	表情やジェスチャーを工夫しながら挨拶をし合う	p.3 C	p.7 W & T 【抜粋】右上の先生の動画のみ見せて意味を推測させる	p.8 S 【ポイント】ジェスチャー付きで歌う	p.7 W & T 【抜粋】①上段真ん中の"happy",②下段真ん中の"hungry",③下段右の"Sleepy"	p.8 L	p.9 A
3	3	How many?	2	1	①1~10の数の言い方や尋ね方に慣れ親しむ、②英語でジャンケンのし方に慣れ親しむ	p.10 S	p.11 P 【抜粋】1~10のみ	p.12 P 【注意】日本のジャンケンは"Rock Scissors Paper, 英語のジャンケンは"Rock Paper Scissors"	p.13 C	p.13 P 【抜粋】1と3のみ	p.12 W & T
4				2	②11~12の数の数え方に慣れ親しむ、③数について尋ねたり答えたりして伝え合う	p.13 C	p.10 S 【注意】11~20は早口で分かりにくいいため、ALTにゆっくり発音してもらおうと良い	p.11 P 【ポイント】11~20を中心にゲームをする	p.13 P 【抜粋】2と、オプション1,2		p.13 A
5	4	I like blue.	2	1	"I like ." "I don't like ." を使った自分の好みを伝え合	p.13 C	p.14 W & T 【抜粋】アメリカの他の2か国ぐらい選	p.15 C 【抜粋】①と②	p.16 L①、L②	p.17 A 【ポイント】この活動で紹介さ	p.15 S 【メモ】The Rainbow Songは英
6				2		p.15 C 【抜粋】①と②	p.15 C 【抜粋】③ 【おすすめ】本時は以下の	p.16 L③	p.17 W & T	p.17 P	